

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。〔８番 和泉克彦君登壇〕

○８番（和泉克彦君）

幸福実現党の和泉克彦でございます。

糸魚川市民の皆様が、この糸魚川に生まれ、糸魚川に住み、この時代に生まれてよかったと心の底から喜べるような真の幸福の実現ができますように、心に寄り添い、市民の皆様のお声を市政に反映させていきたいと考えております。

それでは、発言通告書に基づきまして、１回目の質問をします。

１、令和８年度から令和１１年度県立高校等再編整備計画について。

新潟県教育委員会は、本年６月に、「令和８年度から令和１１年度県立高校等再編整備計画」を公表しています。それによると、当市３校のうち、糸魚川白嶺高校のみが令和９年度より、現行の３学級募集から２学級募集となる予定です。県教育委員会は、募集学級数の見込みは、現時点でのデータに基づく見通しを示したもので、今後、最新の学校基本調査の結果等も踏まえて、本年１０月の教育委員会の議決により、決定されますとあります。

この再編整備計画については、新潟県及び県教育委員会の所管ではありますが、当市はこれまでも０歳から１８歳までの子ども一貫教育として、高校の存続のために高校魅力づくりを推進し、高校魅力化コーディネーターを配置し、授業サポート、進路相談、自習スペースの運営などを実施してきていることや、海洋高校の産官学連携の事例などを踏まえて、以下、伺います。

（１）市内に３校の高校がある当市として、県立高校等再編整備計画をどのように捉えているのか、伺います。

（２）高校３校のそれぞれの特色をどのように捉えているのか、伺います。

（３）この再編整備計画によると、令和１１年度まで、糸魚川高校は３学級、海洋高校は２学級募集を維持する見込みですが、糸魚川白嶺高校は令和９年度に、現在の３学級から２学級へと１学級減の見込みとなります。この学級減をどのように捉えているのか、伺います。

（４）この再編整備計画のエリア⑤の糸魚川市、妙高市、上越市における検討事項の中に、「地域の特性や志願状況等を踏まえ、小規模校の在り方について」、「『産業高校』の設置について」、「総合学科の在り方について」検討すると示されています。そこで、この糸魚川白嶺高校の学級減の見込みを、視点を変えて捉え、当市における看護師不足を補うための一助として、看護科を設置することを県教育委員会に提言できないものか、伺います。

２、デジタル教育の進展による学力・思考力への影響と、既存の教育政策の再評価について。

国のＧＩＧＡスクール構想により、小中学校を中心に１人１台端末の整備が進み、授業におけるデジタル機器の活用が急速に広がっています。加えて、文部科学省では「学習者用デジタル教科書」を紙の教科書と同等の正規教材として位置づける方向で制度の見直しが進められ、全国の学校現場で段階的な導入が進められています。

一方で、先行してデジタル化を進めたスウェーデンやフィンランドといった教育先進国では、児童生徒の学力や集中力、精神面への悪影響が顕在化したことから、紙の教科書への回帰を決断するなど、方向転換が進んでいます。

また、日本でも、デジタル教材に過度に依存することによって、児童生徒の読解力や思考力が十分に育まれない懸念が指摘されています。特に、画面操作やリンク動画による“効率的”な学習が、実は「試行錯誤」や「自力での発見」といった教育の本質を失わせているとの声もあります。

このようなデジタル教育の現状を踏まえ、本市としても、国の制度に単に追随するだけでなく、地域の子供たちにとって本当に望ましい教育環境の在り方を主体的に検討すべき時期に来ていると考えます。

以上を踏まえ、以下、伺います。

(1) デジタル教育の導入状況と実態評価について。

- ① 本市は、端末機器の更新を今年度予算に計上していますが、それも含め、本市におけるGIGAスクール構想に基づく端末整備の状況と、授業等における運用実態について伺います。
- ② 本市におけるデジタル教科書の導入状況及び導入されている場合の紙教材との使い分け方針はどうなっているのでしょうか。特に、授業内での使用頻度や教員の裁量についての現状を伺います。
- ③ デジタル教育における教員や保護者、児童生徒からのフィードバック体制は構築されているのでしょうか。特に、デジタル機器活用に関するマイナスの側面についても意識的に意見を集め、対応を検討しているのか、伺います。
- ④ これまでに寄せられたマイナス面に関する具体的なフィードバックにはどのようなものがあり、それを踏まえてどのような改善策を講じてきたのでしょうか。実施内容をお示してください。

(2) 教育への影響と懸念への対応について。

- ① デジタル学習の常態化が、児童生徒の集中力、読解力、思考力、筆記能力などに与えている影響について、どのように認識しているのでしょうか。全国学力調査等の定量的データと併せて、具体的にお示してください。
- ② 視力、姿勢、精神的ストレスといった健康面への影響については、どのように把握しているのでしょうか。
- ③ デジタル学習の教育効果に関する定量的な評価体制や、紙教材との比較を行う枠組みは整備されていますでしょうか。仮に現時点で明確な体制が構築されていない場合、早急に検討すべきと考えますが、その必要性をどのようにお考えでしょうか。

(3) 教育方針の再評価と教材選択の在り方について。

- ① 国の制度整備やICT推進の流れを踏まえつつも、本市として、紙教材の教育的意義を改めて評価し、活用を見直すお考えはありますでしょうか。
- ② デジタルとアナログ、それぞれの特性や教育効果を踏まえた最適な組合せを、学校現場の裁量で柔軟に選択できるような環境整備をどのように進めていくのか、方針を伺います。
- ③ 今後の教材整備や教育投資に当たっては、制度に機械的に従うのではなく、「子供にとって何が最良か」を基準とした判断が求められると考えますが、どのようにお考えか、伺います。
- ④ デジタル教材と既存の教育手法の強み・弱みを、先行自治体や教育先進国における導入

効果も視野に入れつつ比較検証し、現場における教育効果と統合的に捉えながら、教育内容を継続的に洗練させていく仕組みが必要ではないかと考えますが、そのような再評価と改善のサイクルをどのように構築していくのか、お考えを伺います。

以上で1回目の質問を終わります。よろしくお願いします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

久保田市長。〔市長 久保田郁夫君登壇〕

○市長（久保田郁夫君）

和泉議員のご質問にお答えいたしたいと思います。

1番目の1点目につきましては、過去には、県立高校の将来構想において、市内高校の統廃合を想定する計画が示されたこともあったことから、毎年、注視しているところであります。

2点目につきましては、糸魚川高校は、地域における進学校、糸魚川白嶺高校は、地域において即戦力となる人材を輩出する学校として、また、海洋高校は、水産・海洋関連の高い専門性を持ち、市外からも志願者が多い学校であると捉えております。

3点目につきましては、県において、少子化の状況と近年の志願者数を勘案し、検討された結果であると捉えております。

4点目につきましては、上越市に県立看護大学がある中において、県から市内の高校に、特に看護学科を設置していただくことは難しいのではないかと捉えております。

2番目の質問につきましては、この後、教育長から答弁いたしますので、よろしくお願いいたします。

以上、一番目のご質問にお答えいたしました。再度の質問によりましては、所管の部・課長からの答弁もごさいますので、よろしくお願いいたします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

蘆本教育長。〔教育長 蘆本修一君登壇〕

○教育長（蘆本修一君）

和泉議員のご質問にお答えいたします。

2番目の1点目の1つ目につきましては、タブレット機器は全ての児童生徒に1台ずつ配備しており、授業内容に応じて活用しております。大型提示装置やプロジェクターなどのICT機器についても、活用して学習を行っております。

2つ目につきましては、教師用と児童生徒用のデジタル教科書を教科により導入しており、学習内容と児童生徒の実態から、授業者の裁量によって活用しております。

利用頻度は、教師用デジタル教科書のほうが多く、主に英語や外国語での課題提示や音読、リスニング等で活用している状況であります。児童生徒用の教科書については、本来の教科書のほうが使い勝手がよいという声が教員から寄せられていますが、場面に応じて使い分けをしている状況であります。

3つ目と4つ目につきましては、明確なフィードバックの体制は構築されておきませんが、アプリケーションに対する意見などが教員から寄せられることがあります。

また、学校評価の自由記述等で、保護者からの肯定的な意見をいただくことはありますが、明確に否定するような意見はありません。

2点目の1つ目、デジタル学習と学力との相関につきましては、タブレットの使用頻度による学力差は見られません。

しかし、文章の作成や情報の収集だけではなく、さらに思考を伴う操作が求められるスライドの作成や情報整理などの習得度の高い児童生徒ほど、正答率の高い傾向が見られます。

2つ目につきましては、デジタル学習に特化した健康面への影響は、現時点では把握できておりませんが、影響が懸念される視力や姿勢に関する注意喚起を行っております。

3つ目につきましては、1つ目とも関連いたしますが、タブレットの使用頻度や使用方法と、学力との相関性は評価しておりますが、紙教材との比較は行っていないため、現時点では把握できておりません。

3点目の1つ目につきましては、ICTの活用は、これからの社会で求められるスキルであり、引き続き児童生徒の能力向上を図ってまいります。

ただし、全てをICTで学習するというのではなく、指導内容や児童生徒の実態等を考慮しながら、引き続き教育活動を行ってまいります。

2つ目と3つ目につきましては、1つ目とも関連いたしますが、ご指摘のように、あくまでも「子供たちにとって最もよい方法は何か」ということが重要であります。

このことを踏まえて、各学校における児童生徒の実態に合わせて選択してもらうことを考えております。

ただし、今後ICTスキルは社会においてますます求められることから、必要最低限のスキルは身につけるという点を考慮した上で対応してまいります。

4つ目につきましては、毎年度の教育効果等の評価は、「子ども一貫教育 実践上の努力点」を基に行っております。

また、ICTの活用に関しては、「主体的・対話的で深い学びの充実」で評価し、教育活動の改善を行うとともに、他地域において効果的なICT活用学習等の情報を収集し、当市の児童生徒の実態に合わせて活用を進めてまいります。

以上であります。よろしくお願いいたします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

それでは、市長と教育長からの答弁を受けまして、2回目の質問をします。

順番どおりに行わせていただきます。

まず、県立高校等再編計画ですが、1つ目と2つ目、1つ目については、市内の高校についての、特にその再編整備計画については、常に注視しているということで理解しました。

2つ目ですが、3校のそれぞれの特色を捉えて、高校魅力化コーディネーターの配置が行われているというふうに思います。その魅力化コーディネーターの配置による効果をどのように捉えているのか伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

室橋こども課長。〔こども課長 室橋淳次君登壇〕

○こども課長（室橋淳次君）

お答えいたします。

高校魅力化コーディネーターのほうを配置して3年ほどが経過しているわけですが、やはり当初の頃は、高校側との信頼関係の構築だったりとかというところで様々な苦労した面もございますが、年数を経過する中で、今ほど高校側とは、かなりいい関係が築けてきているのではないかなというふうに感じております。

総合探究の学習の計画ですとかそういった実施に関して、高校の先生方と一緒にコーディネーターが取り組んで実施したり、様々な取組をさせていただいているところでございますけれども、特に糸魚川市独自といたしましては、大学の学校推薦、総合型選抜に向けた志望理由書作成講座というものを当初から実施させていただいております。

近年、子供たちは、自分の考えとかを文章化したり言語化したりするというのがなかなか苦手なお子さんも多いような状況が在るというところの中で、それぞれの進路実現に向けて、そういった志望理由書作成講座等につきましては、高校のほうからも評価はいただいている部分ではないかなというふうに思っております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

今ほどの答弁で効果が出ているということで、特に志望理由書作成講座というのが功を奏していて、上越市内の高校も、これをお手本にして、今年度から始めたという情報も私のところに入っていますので、先駆けとして、お手本になっているのかなというふうに捉えています。

次の白嶺高校の学級減についてですが、これは子供の数が減るというのは、これ致し方ない傾向ではありますが、ということで、学級減は、致し方ないということで捉えるしかないのでしょうか、再度伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

室橋こども課長。〔こども課長 室橋淳次君登壇〕

○こども課長（室橋淳次君）

お答えいたします。

致し方ないかというところでございますけれども、白嶺高校の学級減ということにつきましては、今年度初めて示されたわけではなくて、昨年7月に示された県の再編整備計画から、既に白嶺高校では9年度からの学級減ということが示されております。

県の将来構想では、上越エリア全体を見ましても、今現状39クラスあるものを、令和16年の春の姿として27学級というような形で12学級減らすというようなことも示されておりますので、

この白嶺高校の学級減というところにつきましては、中学校の卒業生数の見込み等を考慮する中で、県のほうで判断をされたものというふうに捉えております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

この再編整備計画のエリア分けが、また一つ微妙で、エリア5が、糸魚川市、妙高市、上越市、この3市ですよ。

ただ、地理的というか地形的に糸魚川市がちょっと離れてる部分があるので、検討事項の中にある小規模校の在り方とか、産業高校の設置とか、総合学科の在り方というのは、もろ糸魚川白嶺高校に当てはまる話なわけですよ。私も県の説明会があったときに、糸魚川市は独特なそういう地形にもあるのだというような形で質問させていただきましたけど、県からは明確な回答はもらえませんでした。ですから、上越広域でひとくくりにされると、やはり問題があるかなという気がします。

そこで、やはり学級減になるのは致し方ないのかもしれないですが、その総合学科の特性を生かして、やはり看護師不足、医師不足が叫ばれていて、これまでも市としていろいろな取り組みされてますけども、なかなか数が増えてこないというのがありますから、ここはやっぱり視点を変えて、思い切って県立高校に看護科を、県内初設置したらどうかなというふうに思うんですけども、それについてはどのようにお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

室橋こども課長。〔こども課長 室橋淳次君登壇〕

○こども課長（室橋淳次君）

お答えいたします。

看護科の設置ということの要望ということで、看護師不足というのは当市にとって非常に大きな課題ということは間違いなく思っておりますけれども、今ほど議員おっしゃるとおり、県内の公立高校では看護科というのがなくて、私立の加茂暁星高校さんのほうで看護科があるということは承知しております。

先ほどの市長答弁にもありますように、上越市に県立での看護大学というのもございますし、また、生徒目線のほうから見ても、先ほど私の答弁にもありましたように、やはりなかなか今のお子さんたち、早い段階から自分の将来をなかなか決められていないといえますか、決まっていないお子さんも多いんじゃないかなといったところもございますので、なかなか高校のときからそういった看護を目指すというところまで達してお子さんというのはどれぐらいいるのかなというところも一方では考えなきゃいけないのかなというふうにも思っております、そういった面も含めて難しいのではないかなという捉えでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○８番（和泉克彦君）

単独での看護科の設置というのがいろいろ厳しい面があるとすれば、午前中の松尾議員の質問の中にもありましたけど、県立看護大があるわけですから、その県立看護大と糸魚川高校、あるいは糸魚川白嶺高校、連携を取るという形で、看護の道というか、そういうのを模索することも可能なのではないかなというふうに思いますが、いかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

室橋こども課長。〔こども課長 室橋淳次君登壇〕

○こども課長（室橋淳次君）

お答えいたします。

高校側のご意見もお聞きしながら進めていかなければならない部分も多々あるかとは思っておりますので、議員からいただいたご意見として受け止めさせていただきまして、また今後の検討課題とさせていただければというふうには思っております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○８番（和泉克彦君）

久保田市長におかれましては、新潟県の教育の発展にご尽力されてきたという、そういうご経験ありますので、やはりこの糸魚川市にとって最良の高校再編というのはどういうものなのかということを、県及び県教育委員会へ働きかけていただきたいというふうに思いますが、いかがでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

久保田市長。〔市長 久保田郁夫君登壇〕

○市長（久保田郁夫君）

お答えします。

この糸魚川の高校の３校体制については、議論をしっかりとしていかなきゃいけないのと、非常にこれは長きにわたって、この問題については対応しなければいけなかったという部分もございました。

まず、結論から言いますと、議会終了後には県教育委員会のほうに、糸魚川市としての質問という形で要望、もしくは質問という形で日程調整をして、出かけていきたいと思っております。松尾議員の際にもお答えしましたように、今後、文科省がどういうふうな、いわゆる専門高校の対応を、いわゆる新潟県のように産業高校とするのか、それとも特化した高専化をしていくのか、その辺のところはまだ正式な形でリリースされておきませんので、それについては推移を見て、やっぱり本県に唯一ある海洋高校についての高専化、それに付随すると、地域の中で高専に、いわゆる総合学科ではないコースを取り入れて、大学との連携ができるようなシステムができないものかというよ

うな研究材料にしながら、県教委については、糸魚川市としてはこういう具体的な高校再編について考えを持っているという部分をこれから関係課、教育委員会だけではなく、やっぱり糸魚川市の産業構造を見据えた上で、これからの高校再編に向けて、また、それに付随する大学等の連携に向けては考えなきゃいけないと。そういう中で、前向きに検討させていただきたいと思いますので、またいろんな部分でお知恵を拝借させていただきたいと思います。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

ありがとうございます。何事も諦めたらそれでTHE ENDなんで、可能性は低くても、それをまた大きく広げていくということも我々の仕事かなというふうに思いますので、ぜひお願いしたいと思います。

それでは、大きい2番のデジタル教育に移ります。

まず、（1）の導入の部分ですが、コロナ禍があつて、前倒しにGIGAスクール構想を導入されたという経緯もありますけども、答弁の中に事業内容に応じて活用等の答弁でしたが、その事業内容に応じてとは、具体的にはどのような事業とか、科目を指しているのかということと、例えば国語、算数、理科など、科目ごとの使用頻度に差はあるのかとか、調べ学習とかドリル型とか発表型という授業形態がありますが、それによる違いがあるのか、お示してください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

お答えさせていただきます。

まず、授業内容に応じて活用ということなんですけれども、各教科で活用しており、教科による大きな差はございません。それぞれ事業者が、効果的な場面を考慮して使用しているというような状況になっております。

それで、場面ということになってきますと、情報収集での使用ですとか、あるいは基礎的な内容を確認するためのドリル学習、あるいは学習のまとめをするときの発表ツールとして使用しているというような形になります。

そして、今場面というふうに申し上げましたけれども、その場面ということもあるんですけども、それよりも、また子供たちの年齢といいますか発達段階といいますかそういうところにも影響を受けておりまして、やはり発表ツールとして使うというのは、小学校高学年ですとか中学生ですとか、そういった、ある程度、年のいった児童生徒が行うような形になりますし、また、低学年の子供たちは、アニメーションを使って漢字の書き順を見た上で自分の手で書いてみるとかという、そのような形での使い方になってきているかと思います。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕



○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

具体的にお示しいただきましたけど、その活用が実際に学力向上とか思考力の育成につながっているのか、教育委員会として把握検証しているのか伺います。

なお、端末整備については、今年度予算に計上されておりまして、多額なコストがかかっていますが、その投資に見合った成果は確認されてのことでしょうか、伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

タブレットによる学習と学力との相関関係につきましては、全国学力・学習状況調査の質問紙と正答率とのクロス集計の結果を基に分析しているところでございます。それで、タブレット学習が学力向上に有効に働いているというふうに結果が出てきているかと思えます。どうしてそういうふうに申し上げるかといいますと、タブレットをしっかりと使いこなしているというふうに質問紙のほうで答えた生徒のほうが、明らかに学力が高いという結果が出ております。パーセントといえますかポイントで、10ポイントから17ポイントほど差がございまして、そういったようなことでしっかりとタブレットを使った子供のほうが、活用できている子供のほうが学力が高いというような結果が出ております。ゆえに、それなりの費用をかけて整備してやっている価値はあるというふうと考えているところでございます。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

というふうに効果が出ているということであれば、全ての生徒の底上げというか、そういうところにもやはり力を入れていかなければ、やはりタブレットを導入する意味合いというか、そうなれば、ますます増してくるというふうに思います。

次に、デジタル教科書と紙教材等の使い分けについてなんですけど、これ学習内容と児童生徒の実態から、事業者の裁量によって活用という答弁いただいたんですけど、これ最後の教員の裁量によってということになると、小中学校の学校間での教育格差が生じかねるんじゃないかなという、そういう懸念が浮かぶんですけども、それについてどのようにお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

当然、今ご指摘の点につきましては、教育事業者の裁量によります教育格差というのは懸念していかなければいけない点だというふうに考えております。

ただ、教員の指導力向上につきまして、デジタル機器の活用も含め、各種研修等において行って

いるところでございます。また、そうでなければならないというふうに考えております。そういった研修の中で、これだけは使えるようにしましょう、ここは最低ラインですということを先生方にお示しして、そこはみんなで同じ方向を向いて取り組んでいこうというようなことで指導しておりますし、また、そういったようなことで検証を行っているところでございます。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

理解できました。私も実際、現場にいたときにはいろいろな研修を受けさせてもらってるんで、何もしてないということではないと思うんですね。確認の意味でお聞きしました。

次に、これだけデジタル教育が進んでくると、明確なマイナス面の申出は今のところないという答弁でしたけど、本当に寄せられていないというのであれば、それはひょっとしたら聞き方というか、仕組みの不備というふうに受け止めるべきであるというふうに考えます。今後は、意識的にマイナス面の意見を収集して、改善に生かす体制を整える必要があるというふうに私は考えるんですけども、見解を伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

今のところ、現状マイナス面のご意見をいただいているというような状況はございません。例えば授業参観等で、結構、先生方、保護者が見てる前でデジタル機器を活用して授業されているんですけども、そういったところ保護者の方から、いや自分たちの頃とは、今、全然勉強が違うんだねと言って、こんなに使いこなせていてびっくりしたといったような、そんなような声をお聞きすることが多いかというふうに思っております。今後、そういったようなことについて、改めてご意見をいただくような機会を設けて、改善に生かしていければというふうに思っているところでございます。

ただ、デジタル機器の影響というのは、やはり学校で整備しましたタブレット端末等だけではなくて、今現状を考えると、多くの子供たちが、家庭でそういったような、スマートフォンですとか、タブレットですとか、あるいはゲーム機ですとか、そういったようなものも影響を受けているのかなというふうに思っています。そういった意味での生活習慣を含めたところでの面ですとか、あと情報、モラルの面ですとかでマイナスというところは、ご意見というよりも、やはり現場の実感として持っているところがございますので、そこら辺には問題があるというふうに認識しているところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

明確には出てないということで、でもいろんな形で意見を集約するような形はあるというふうに理解しましたが、いっそのこと学校評価というのがありますから、保護者へのアンケートの中に、明確にこのデジタル教育に関するメリットやデメリットを質問事項に盛り込んだらどうかというふうに思いますが、いかがでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

現在、その学校評価につきましては、2つのパートに分かれておりまして、市全体で共通で聞く部分と、それぞれ学校の校長の裁量でつくっている部分というところがございます。現在のところ、市の共通パートのほうでは、そういったようなご質問は直接的にはないんですけれども、そういったところでの取り入れ、また学校のほうに、学校独自の質問内容についてそういったところを把握するのかということについて、検討していければというふうに思っております。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

繰り返しになりますけど、GIGAスクール構想を導入されて、もう5年ほどたっているのに、どういうスタンスで保護者の方たちがいるのかというの、やはり学校現場として、あるいは教育委員会としては知っておくべきだというふうに思いますので、検討のほうをお願いしたいというふうに思います。

次、（2）の教育への影響と懸念についてですが、1回目の質問で、全国学力調査等の定量的データと合わせてというふうに伺ったんですけど、その点についての回答がなかったので、いま一度お願いします。

あわせて、答弁ではデジタル学習と学力の相関については、タブレットの使用頻度による学力差は見られないということでした。当市の児童生徒の集中力や読解力、思考力等について、全国学力調査の結果や当市独自の学力調査をどのように分析しているのか、具体的にお示してください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

デジタル学習と学力の相関の部分で、定量的というようにお話がございましたが、先ほど少しお話ししましたが、やはりその辺は、学力・学習状況調査の質問紙とそれから調査本体の正答率のクロス集計というところになってくるかと思います。そこで10ポイントから16.5ポイント、約17ポイントぐらいの差が出ているということで、効果があるのではないかなということ考えておるところでございます。

あれですね、やはり文書作成ですとかプレゼンテーション作成ですとか、そういったような内容をしっかりできるお子さんのほうが、何ていうんでしょう、正当率が高いといえますか、いい結果

を残しているというようなことになってきます。

また、そういったようなこともいろいろ細かいところから分析しながら、教員職員の研修に生かしていければというふうに考えているところでございます。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○８番（和泉克彦君）

次に、健康面への影響についてですけど、明確に把握していないということでしたが、毎年、学校健診で視力、姿勢等の調査結果は、毎年出てるかと思います。ＩＣＴ活用が進む前後で比較すれば、一定の傾向を把握できるのではないかなというふうに思うんですが、本市としてそうしたデータをもし分析していないということであれば、児童生徒の健康を軽視していると受け止められかねませんので、その点について見解を伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

ＩＣＴということの観点で比較しているわけではないんですけれども、子供の視力ですとか、そういったような健康面の変化については、毎年検証しているところでございます。

ただ、そこでＩＣＴがとかということの視点ではしてはおらないということだけなんですけれども、そこら辺の今の比較でいきますと、正直言いまして、タブレットが導入される前の時期と昨年度の様子を比べますと、あまり大きな差はないというのが現状でございます。具体的に言いますと、視力について小学生が若干、約３ポイントほど低下している程度で、あとは中学生のほうについては、視力はほぼ横ばい、姿勢として、指標として使えるのは、脊柱側弯症の比率かと思っているんですけれども、そちらについては、かえって数値は改善されているというような状況がございます。その辺から考えますと、タブレット機器導入によります健康面に関する影響というのは、さほど大きくないのかなというふうに思っておりますが、ただ、先ほど来申し上げたように、タブレット以外にも、子供たちはゲーム機ですとかそういったようなことをたくさん家で使っているかと思えます。そういったような影響も考えると、今後、もっと影響が出てくる可能性はあるかと思っておりますので、推移については十分注意して見ていき、もし大きな変化があった場合には、またそこで対応を考えていきたいと思えますし、また日頃から、こういったような健康面についての注意喚起は行っていきたいと考えているところでございます。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○８番（和泉克彦君）

教育現場では、その視力検査について言うと、以前は事細かく１．５、１．２、１．０という記録をしたと思うんですけど、最近は、その範囲を広げてＡ、Ｂ、Ｃというような記録をしているので、なかなかそこまでつぶさに分析ができないのかなというのは承知しております。でも、全国的にそ

ういう低下の情報が流れてますから、糸魚川市だけ例外ということはないので、ぜひ注視していただきたいというふうに思います。

もう一つ、健康面ですけど、精神的ストレスによる影響ということを考えると、やはり不登校とかいじめという話になりますが、残念ながら当市においてもタブレットを使ったいじめ案件が発生してと。それを踏まえて、教育委員会としては、今後どのようにタブレット端末を教育活動に生かしていくのか、今回のことを踏まえて、今後の方向性というものをどのように打ち出しているのか、お示しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

今、いじめ・不登校というお話がございましたが、確かにいじめ・不登校に関しましては、当市だけではなく、全国的に増えている状況かというふうに考えております。

そういった中で、デジタル機器を使うということについて、精神的ストレスというようなこともお話がありましたが、そういったようなデジタル機器だけに限らず、やはり子供たちのそういった精神的ストレスを解消するために、相談員の充実ですとか、あるいはそういった教育相談体制、外部につなぐ、諸機関につなぐ体制等を整備しておりますので、そういったような活用を進めていきたいというふうに考えているところでございます。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

これはデジタル教材には関係ないと思いますが、夏の甲子園である高校が、暴力事件がいじめに発展してということを、いじめとはしないで単なる暴力事件、部内での出来事というふうに報告して、それで収まったのが結局大きな話になって、全国大会に出たのに1勝して、次からもう出場辞退ということになってますよね。ということは、やはり何事も初めが肝腎ということで、初期動作が適切だったかどうかということが、やはり問題だというふうに思うんですよね。ですから、常に注意はしているかと思いますが、やはり現場で起きてることは本当にリアルで起きているので、なるべく早く対応していただければというふうに思います。

次に、（3）のほうの教育方針の再評価と教材選択の在り方に移ります。

答弁では、全てICTにするわけではないというふうに答弁いただきましたけど、そういうことになる、紙教材の教育的意義についてはどのように評価しているのかということをお聞きしたいと思います。特に、読解力や記憶の定着、あるいは筆記力の育成といったICTでは、代替、代替えですかね、代替しづらい効果について、教育委員会の認識をお示してください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

今ほどご指摘ありましたように、やはりデジタル的な指導がそぐう場面と、やはり手とか体を使って勉強しなきゃいけない部分というのは、当然あるというふうに考えております。はっきりとしたエビデンスがあるわけではないんですけれども、やはり現場にいた実感としまして、子供たちの頭の中にいろんなことをインプットするのはやっぱり体とか手とかを使わないと、なかなかインプットできないのかなというようなところがあるかと思います。そういったようなところで、それぞれの指導内容の特性を見まして、紙がいいのかデジタルがいいのか、それぞれをその内容に応じて、判断して使っていくということになるかと思っております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

そうなれば、デジタルのいい面は私も理解してますし、実際使ってみて重宝するなという部分はあるんですけど、やはり最終的にはアナログ的な部分で、確認したりとか検証するというのも身をもって体験してますので、それぞれの組合せがやっぱり大事なかと。バランス感覚でしょうかね。それについても2つ目と3つ目でお聞きしてるんですけども、結局、答弁では学校における児童生徒の実態に合わせて選択してもらおうというふうな答弁でした。

ということになると、何かちょっと冷たい言い方になるかと思うんですが、教育委員会としての糸魚川市の教育方針が示されていないんじゃないかなって、これはやりましょうというようなね、そういうものが示されていないようにちょっと受け取ってしまったんですけど。結果として、学校ごとに対応が大きく異なって、市内で教育効果に格差が生じる懸念はないのか、いま一度伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

各学校での格差が生まれないかということかと思うんですけども、そこら辺につきましては、やはり先ほど申し上げたように、これだけということは各学校のほうに意識してもらうように研修等で伝えているところでございます。やはり子供たちに、これからの世の中、タブレットですとかそういったような情報機器は活用していかないと生きていけない世の中になっていると思いますので、そこを生き抜くために最低限のスキルは身につける。その上で、もう少し発展的な内容については、デジタルを活用したものが適しているのか、あるいはアナログ的な活動が適しているのか、そういったようなことは様々な要件を考えながら各学校、事業者で進めていくということになるかと考えております。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

別に学校任せじゃないってことが分かりましたので。

続いて、じゃあ、それぞれの学校の実態というのは、実際には何を指しているのか。どのような違いを想定されているのか、教育委員会としての具体的なお考えをお示してください。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

実態ということになりますと、様々な要件があるかと思います。例えば学校の規模ですとか、あるいは地域との連携度、そういったようなものがありますし、また、子供たちの持っているといいますか、何ていうんでしょう、子供たちが何に今向かっているのかということもありますし、また、その授業で子供たちにどんな力をつけたいか、そういったようなことも関係してきます。そういったようなことをいろいろ考えながら授業を構築していくというのが、学校の教師の役目だというふうに、私考えております。例えばこの授業について、こういう狙いがあるからデジタルを使わせる、こういう狙いがあるから、やっぱり人と関わらせてアナログを使う、そういったような判断が出てくるかと思います。その授業の狙いによって、デジタルを使うのかアナログを使うのか、そういったようなところが変わってくるのかなというふうに思っているところです。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

今の答弁にあったように、具体的な実態の違いが想定されてるわけですね。ということであれば、全てを統一してやるというのは難しいとは思いますが、その類型ごとに応じた指針とか、言わば場合分けですね、そういうようなもののガイドラインを、ある一定基準を教育委員会として策定して、全体としての一定の教育水準を確保すべきではないかというふうに思うんですけど、いかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

一定の指針ということになりますと、やはりちょっと先ほどから申し上げている一定の身につけなければならないスキルになってくるかと思います。それは保証した上で、その土台の上に授業を構築し、子供たちの力を伸ばしていくという、そういう形になるかというふうに考えております。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

今答弁いただいたことで理解しました。今までデジタル教育に関わるメリット・デメリット、それに対して教育委員会としても情報収集をして、様々な取組を平素から行ってきたというふうに理

解しました。例えばその成果が、全国学力調査の結果向上など、客観的な改善効果として表れているのかどうか伺います。新聞紙上では、2021年の結果と、2024年、3年たってからの結果、平均スコアが全教科が落ち、全ての教科においてが落ちというような新聞報道があるんですけど、それも踏まえて、その改善効果として表れているのか、いま一度伺います。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

ご指摘のように、今回の全国学力・学習状況調査は、全国的に平均点が下がっているというのは我々としては衝撃的なニュースとして受け止めているところでございます。その傾向は、当然、新潟県もそうですし、糸魚川市も同様でございます。

ただ、それがICTとかと本当に影響しているのか、あるいはコロナ禍ですとかそういったような影響があるのかということについては、まだちょっと正直しっかりと分析ができていないところになってくるかと思います。

ただ、やはり子供たちの主体的・対話的で深い学びというのを育てていかないと、今の全国学力・学習状況調査の問題には答えることができないような状況になってきているかと思います。ですので、やはり第一義的には、ふだんの授業改善をしっかりと行って、子供たちにそういった深い思考力ですとか、そういったようなものを身につけさせる。そういった授業の改善を行うことによって、子供たちの力を高めていきたいと思います。その一つの、何ていうんでしょう、道具としてICTも活用していく。もちろん先ほど来申し上げているように、内容によっては、当然紙も使いますし、ICTも使いますし、そういったようなことの中で総合的に子供たちの力を高めていければと考えております。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

鶴本教育長。〔教育長 鶴本修一君登壇〕

○教育長（鶴本修一君）

ちょっと補足をお願いいたします。

全国学テの結果、市のほう、全体については教育委員会のほうで今分析をかけて、様々な角度からやっていますが、各学校では、学校ごとの実態についての結果が届いてますので、それに基づいて総括的に研究主任を中心にしながら分析に入っております。

そういった中で、非常に効果が上がった。ぐっと伸びているというような部分のところと、それから落ち込んでるといふ部分のところは、かなり時間をかけて分析をしている、現場ではしていません。そのときに、デジタル教育の効果というふうな側面も加味して分析する必要があるんじゃないかなというふうに私も考えてます。校長会にも働きかけていきたいと思うんですけども。今現在、学校現場では、とにかくタブレット端末が急に、一斉に配置されまして、整備されまして、5年目を今迎えています。最初はとにかく使ってみよう。とにかく親しんでもらいたい。とにかく使おうよ。教師も子供たちも戸惑う中でもってそんなふうなスタートだったと思うんですけど、5年目になり



まして、使うことによる効果、どういう場面で、どういうふうな仕組み方ができるのか、活用できるのかということの効果についての情報交換を、学校間、あるいは教科の先生方同士でもって情報交換するように積極的になってきました。そのような様子も学校訪問等で聞かせてもらいました。だとすると、1つのステップが終わって、より質の高い使い方によって学力向上につなげようというふうな部分のこの動きが、いよいよ本格的に始まっていくのかなというふうなことを期待もしています。その意味合いの上でもって、教育委員会も意見交換、情報交換の中で、この教科の、この学年では、こんな単元では、このデジタルを使うと非常に効果があるよというふうな部分のところを広めていくことによって、市内の学習の環境の、一つの何ていうか方向性みたいなものが出てくるのかなというふうに思ってます。2年、3年かけて、この分析等を通して、より効果的な使用方法、活用方法というふうな部分のところの事例を幾つも拾って行って、積み重ねていく、そんな努力もしてみたいなというふうに思ってます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

今教育長からご答弁いただいたこと、ごもっともだというふうに思います。

ただ、私もデジタル教育を全面的に否定してるわけじゃなくて、あくまでもバランス感覚を持つてというふうに思っていますので、やはり紙の教材のよさというのもやっぱりあるわけですね。それをやっぱり紙の教材とデジタル教材の教育効果をやはり定量的に比較していく仕組みというのを教育委員会というか、当市として構築する必要があるかと思うんですが、その点についてはいかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

デジタル教材のほうにつきましては、今、定量的な評価というようなお話がございましたが、現在、試行的に取り入れている学校もあるんですけれども、全面的な取り入れというのは、令和8年度からになる予定になっております。ですので、今のところデジタルドリルとかを使った教育効果がどれくらいあったのかということをちょっと検証することが今できない状況になっています。ですので、この後それを正式に導入して、各学校で取り組んでみて、どういう結果になったかというのが、少なくとも令和8年度がちょっと終わらないと何とも言えないというような状況になってくるかと思しますので、もう少しちょっと長いスパンで見させていただきまして、評価をしていきたいと考えているところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8 番（和泉克彦君）

やっぱり教育活動というのは、単年度では結果が出ないものだというふうに思ってますので、やはりデジタル機器を使いながら、数年スパンで試行してみてもいいんですけど、別に子供たちがその実験台ではないので、やはり大人として、教育者として、デジタルのよさというのはどんどん子供たちに教えていけばいいですし、その悪いところもやはり同時に教えながら、いい形で取り組んでいく必要があると。

私の1回目の発言通告書のところでも、フィンランドとかスウェーデンで、やはりデジタル機器による悪影響が顕在化したので、原点回帰ではないですけど、やっぱりアナログ的な部分に戻り始めたというような教育先進国の動きがあるんですよね。それを全てうのみにするわけではないですけども、やはりそれも一つの他山の石じゃないですが、デジタル教育における弊害も必ずそこには潜んでいるかと思いますので、そういう世界的な広い視野を持って、デジタル教育に臨んでいただきたいというふうに思います。

あともう一点なんですけど、毎年、教育効果等の評価、これが子ども一貫教育実践上の努力点、それを基にして行っているという教育長の答弁でしたが、その教育効果等の評価が、毎年度の努力点だけにとどまらずに、1つのサイクルといいますか、効果測定をして、それを踏まえて改善点を見だし、さらに再評価するという、そういうサイクルを仕組みとして確立したほうが、教育内容を継続的に洗練していくことになると思うんですけども、それについてのサイクルの構築というか、それについてはいかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

そのサイクルということなんですけれども、当然、様々な指標を用いまして、その年の様子进行评估した上で、次の年にどういう目標にしていこうかということについては、策定委員のほうで検討しまして、行っております。一例で申し上げますと、本年度、特に学習の部分では大きく変えさせていただきました。やはり先ほど来申し上げているように、対話的で深い学びというのをしっかりと勉強させなきゃいけないので、そちらのほうに、何ていうんでしょう、重点をシフトしようというような議論がなされまして、今年度、そちらのほうに差し替えさせていただいております。

また、令和7年度終わってみて、それがどうだったのかということを委員のほうで検討しまして、また修正して、次年度のものをやっていく。そういったようなサイクルは、ここずっと確立しておりますので、それをしっかりと続けていきたいと思ってるところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8 番（和泉克彦君）

もう一点ですね、答弁をずっと聞いてまして、教員の裁量によってということにちょっと違和感というか、疑問が持つという質疑もさせてもらったんですけど、最低限これだけということにな

ると、先生方の中でも技量のばらつきがあると思うんですね。最低限身につけている先生と、スキルをそれ以上に身につけている先生、その先生は最低限のところで止まってなきゃいけないのかなと、ちょっと嫌みな言い方になりますけど、そこはどうなんですかね。精いっぱいやっても最低限のレベルしか保てない、僕もそのレベルだとは思いますが、ただそれよりも遥かに進んでる先生がいて、その先生はそれを出し惜しみしながら待ってなきゃいけないのか、ちょっと微妙な質問になりますが、いかがお考えでしょうか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

ご指摘のように、当然、先生方の間でデジタルスキルというのは差があるというふうに考えております。端的に言うと、若い先生は非常に得意です。今の子供たちが教えなくても、SNSとかをばっば、ばっばと使えてしまうように、若い先生たちは教えなくてもすぐ入っていただけます。私ぐらいの年になってくると、なかなか、何ていうんでしょう、スキルが身につかないとかというところもあるかとします。やはりその辺は、学校の先生たちの研修といいますか学び合いですとか、そういったようなことが大事になってくるかと思います。当然、我々のほうから研修としての情報提供はいたします。

しかし、学校の中では授業研究といいまして、先生方の授業をお互いに見るというような、そういったような活動がしっかりと行われております。そういった中で、若い先生が使っている中で、そういったようなものが学校の中に伝播するということは当然考えております。そういったようなこと、それと、あと先ほど申し上げた、こちらから提供する研修、そして、やはり学校の先生は、当然研修する義務がございますので、そういった中でしっかりと身につけていっていただく。ですから、その最低のラインは絶対確保した上で、自分ももう少し向上してもらおうという、そういうことは常に注意喚起して、先生たちの資質も向上させていきたいと考えておるところでございます。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

先生方でも力量が違うというのは分かりました。どのように対応するかというのも分かったんですけど、そうすると、子供たちの中にもやっぱり差がありますよね。そうしたときに、よく高校の授業等である、習熟度別授業というか、そういうのも小中に取り入れていかなきゃいけないんじゃないかなという気がしますが、それについてはいかがお考えですか。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

小川こども教育課長。〔こども教育課長 小川豊雄君登壇〕

○こども教育課長（小川豊雄君）

習熟度別授業ということにつきましては、もう実際にそういったような取組をしている学校もご

ざいます。特に、ある程度、教員に余裕のある学校等では、クラスを解体して、例えば2学級あるクラスを解体して、しっかりコースとか、そういったような基礎的なことをしっかりやるコースと、あとそれから、発展的なこともちょっと取り入れてやるコースとかというふうに分けて授業することはございます。そういったようなものも含めて習熟度別ということはやっていきますし、また、例えば同じクラスの中でも習熟度が違った場合に、教え合い、学び合い、そういったようなことを取り入れることもございます。教えると、教える側の理解も深まる。そして、子供同士で教えることによって、そうなんだ、そうやってやればいいんだねとかということが素直に入ってくる。そういったような状況もございますので、当然、教師による習熟度別授業とかもございますし、子供たちの学び合い、それからこの先、デジタル教材等を使っていきますと、A I とかが入ってくる中で、子供の学びに最適な問題を提示してくれるような、そういったようなデジタル教材とかも今後開発されてきておりますので、そういったようなものを活用する中で、個別最適な学びというのも実現できるかと思っております。いろいろな方策を組み合わせることで使うことによって、しっかり子供たちの力をつける、そういうふうと考えております。

○議長（古畑浩一君）

議長から申し上げますが、答弁については要領よく簡潔に、教育論は特に深くなりそうなので、気持ちは分かりますが、もう少し簡潔によりしくお願いをいたします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

それでは、今回の私の一般質問は、主にデジタル教育に関してのいろいろな細かいことまでお聞きしました。

ここで、デジタル教育のメリット・デメリットについて、様々な観点から靄本教育長と久保田市長から、お考えをちょっといただきたいと思うんですが、お願いします。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

靄本教育長。〔教育長 靄本修一君登壇〕

○教育長（靄本修一君）

お答えいたします。

これからの子供たちが、大人になって生き生きと生活する場面のイメージを考えますというと、やっぱりデジタルとの関わり方が、どのような関わり方ができるかによって、うんとまた可能性の広がりが求められるんじゃないかなと思うんです。だとすると、やっぱり子供たちは小さいうちから親しむということと同時に、どういうふうな使い方がいいのか、それからどういうふうなことがマナーなのか、ルールなのか、してはいけないことは何なのかという部分のところの、きちっとしたメディアリテラシーみたいなものについてはしっかりと身につけた上でもって、効果的な楽しい、そして、子供たちが満足するような、そんなふうな学習展開みたいなものが求められるんだろうと思います。特に小学校、中学校の義務教育のうちについては、その辺の部分のベースづくりになりますので、一年一年、一回一回積み上げる中でもって、子供たちに基礎的な部分については身につ

けさせていきたいというふうに思ってます。将来的に、社会に出たときに困ったことがないように、困り感にないように、その関わり方と学び方についての基礎をしっかりと子供たちに身につけさせたいというふうに思っています。

以上です。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

久保田市長。〔市長 久保田郁夫君登壇〕

○市長（久保田郁夫君）

それでは、お答えさせていただきます。

できるだけアナログ的にお答えします。

私の教育的な信念は、「何々が」できるようになる、この第一人者です。例えば私は、例えば前方展開ができる人が、体育の授業で教えられなくても「何々が」できるんです。でも前方展開ができる生徒は、「何々を」できるようになる。だから自分ができることを人にこうすればできるんだよということを伝えていくというのが教育の私は本質だと思います。

それが、今いうデジタル教材を使って、それができるのかできないのかという部分もありますけれども、一つの例として、多分皆さんご存じの方いらっしゃると思いますけれども、「銀の匙」という国語のこういう教科書を使った、灘中学でやった橋本先生が使った学習があるんですね。「銀の匙」を朗読させながら、たこ揚げをするという部分の表現が出てきたときに、すぐ竹を切りに行って、たこを作って、外でたこ揚げをする。そうすると、今日はこの風を吹いているから、こういう方向でこういう糸を使ってという部分に出てくる。それで、その国語の授業で、全て今でいうサイエンスから何から何まで培ってきたんですね。それが今から何十年も前でやってきたことなんです。それを日本が取り入れたのは、どういう名前をつけたかというと、STEAM教育、STEAM、Sはサイエンス、Tはテクノロジー、Eはエンジニアリング、Aはアート、Mは、いわゆるマスマティックス。こういうふうなことを、いわゆる1つの授業、今日の授業は、1限目は体育ですよと言っても、体育の中にSTEAM教育というのを入れていく。その中にデジタル教材を取り入れたのが今の日本なんです。映し合って、今のフォームはこうだから飛べないんだよというふうなことを教え合う。自分で目で見て、それを矯正していくという部分。そういうことが、このデジタル教材を使った走りなんですね。そういうことを根本的に考えて、今糸魚川の教育において、そういうやっぱり教育のそもそも論から展開して。

○議長（古畑浩一君）

市長、簡潔に願います。

○市長（久保田郁夫君）

しなきゃいけないと思っております。

以上です。申し訳ありませんでした。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

和泉議員。

○8番（和泉克彦君）

最後に、私の思いの一端を述べさせていただきます。子供たちにとっての学びやすさというのは、必ずしもデジタルであることとイコールではないというふうに思っています。

教育とは、本来、便利さよりも深さが求められる営みで、その媒体としての教材の在り方というのは、極めて本質的な課題だというふうに思います。

教育の目的は、単に情報を早く処理するということではなくて、時間をかけて思考し、理解し、納得して学ぶという過程を通じて子供たちの理性や感性を豊かに育てることにあるというふうに思っています。さらに突き詰めて言えば、実社会に子供たちが出たときに、仕事ができ、社会的にも尊敬を受けるような人間、あるいは自分が今まで受けたご恩を他の人々に返していけるような人間を育てるということも教育の大事な部分だというふうに思います。

一般質問の冒頭で申したように、本市としても国の制度に単に追従するだけではなくて、現場の声や子供の学習実態に基づいて、紙の教科書の意義や効果を再評価して、地域の教育方針としての明確な姿勢を打ち出すことが必要であるというふうに考えます。

糸魚川市の子供たちにとって、本当に望ましい教育環境の在り方を主体的に検討すべき時期に来ているというふうに思います。教育のＩＣＴ化という名目が、実は教育の根幹を見失わせることになっていないのか、改めて原点に立ち返って、糸魚川市の子供たちにとって最もよい学びの環境とは何か、丁寧な検討と方針の構築を強く求めます。デジタルとアナログ、それぞれのよさを生かし、バランスを取りながら、よりよい教育が糸魚川市の子供たちに施されることをお願いして、私の一般質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（古畑浩一君）

以上で、和泉議員の一般質問が終了いたしました。

２時５５分まで、暫時休憩といたします。

〈午後２時４０分 休憩〉

〈午後２時５５分 開議〉

○議長（古畑浩一君）

休憩を解き、会議を再開いたします。

次に、利根川 正議員。

〔「議長」と呼ぶ者あり〕

○議長（古畑浩一君）

利根川議員。〔６番 利根川 正君登壇〕

○６番（利根川 正君）

利根川 正です。

１回目の質問をお願いします。

１、猛暑、渇水による稲作への影響と農業政策について。

６月からの高温と雨不足により、稲作への影響が出ており、令和５年度と同じ１等米比率の低下と収穫量の減少が心配されます。農家も対策を実施しましたが、自然災害とも言える気象条件には